

人生の処方せん



～足のウラで考える～

When the rubber meets the road

都会では自殺する若者が増えている／今朝来た新聞の片隅に書いていた／テレビではわが国の将来の問題を誰かが深刻な顔をしてしゃべっている／だけでも問題は今日の雨、傘がない、で始まる井上陽水の歌。経済成長の終焉、オイルショックを背景にして 1972 年発売のアルバム「傘がない」は大ヒットした。この国の深刻な問題と、いま目の前のこと、雨が降ってきて傘がない、ことを並列に並べたメッセージ。今回の講座のテーマは、この歌詞の中に潜む。

人生の処方せん～渡辺謙の場合

過去の栄光にしがみつからない 日本文化の美学・武士道を扱ったアメリカ映画「ラストサムライ」2003 年で、トム・クルーズと共演、アカデミー賞助演男優賞ノミネートされた渡辺謙は一躍ハリウッドでブレイクする。しかし決して大スターになったからといって驕り高ぶりは感じられない。「新しい現場に入ってゆくと、イチイやゼロから向き合ねばならない」と謙虚である。



日本タレント名鑑

感じたときが行動のとき ロサンゼルスの本屋で、偶然「明日の記憶」を手にする。一晩で読み終え、これを伝えたいという強い欲求にかられ、すぐにその朝、原作者に手紙を書く。前回の「ラストサムライ」のようなインパクトのある作品より、インパルスの余韻が残るような作品に引き寄せられた。

病を売り物にしない 病は誰にでもある。それがあつての日常を「明日の記憶」を通じて伝えたいと思った。渡辺謙自身、1989 年急性骨髄白血病にかかる。NHK 大河ドラマ「独眼竜政宗」で主演を演じた 2 年後の出来事。日本での役者人生の最盛期、病に打ちひしがれる。がしかし、この悲劇からみごとカムバック、より深みのある役者として再生する。「病気そのものが自分の人生を変えるのではない」、病によって今まで見えていなかったものが見えるようになったという。病気を特殊なものとして売り物にしない態度は、渡辺謙の魅力である。

初めから目標を決めない 世界のスターになった今、将来の目標を問われ、「初めから目標を定めなくて、自分が自分として彷徨う。あえてビジョンはもたない、その方が出会いのチャンスが増える」と言う。

世界・社会の大問題と、一見小さな自分の世界のこと。

「大きな和解も、自分の周りの小さいいざこざの和解も同じこと」(大江健三郎)。「私たちの頭の中で起こっていることを捉えること。なぜなら、戦争を起こす危険性は、まず頭の中で始まるからである」(ユング)。

冒頭で取り上げた「傘がない」の歌詞に込められたメッセージは、壮大なスケールの「ラストサムライ」と、一人の男の小さな世界を描いた「明日の記憶」に投影される。日本の大きな歴史の転換期、明治維新の武士道を見事に演じた渡辺謙が、次の作品で中年男の病を同スケールで描いたところに、私は彼の感じて動く(足のウラで考える)人生の処方せんを観るのである。

<事例>

歌・映像 「傘がない」1972 年
米映画「ラストサムライ」2003 年トム・クルーズと共演
渡辺謙 NHK100 年インタビュー 2007/4/12
映画「明日の記憶」2006 年
仏教・キリスト教の共通点 / 処方せんを出さない
大江健三郎 小さな和解、大きな和解
歌・井上陽水 「傘がない」1972 年

円了のホームページ: www.enryo.jp

